大きな幸せ！と書いてふこう！と読む！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな幸せ！と書いてふこう！と読む！

【Ｎコード】

Ｎ０３６２Ｅ

【作者名】

雨月

【あらすじ】

不幸の塊といわれる男、吉野幸児（よしのこうじ）。彼は大きな幸せを掴むためにとある学園に入学していたのだが、一年たったのに不幸が続くばかり……だが、そんな彼にも転機が訪れる。

プロローグ／第一話　不幸と思うから不幸になる

プロローグ

　自分が不幸であると気がついたのは五歳ぐらいだっただろう。何かイベントごとがあっていこうとすると雨が降り、小学校六回中の五回は雨で延期になったり午後からの競技だけだったりする。そう、これだけなら雨男というレッテルを貼られるだけで済んだのだが……学校帰りに人間違いで誘拐されそうになったり、花瓶が空から降ってきたり、マンホールの上を歩けば抜けて危うく落ちそうになる。おかげで話し友達とかはできたのだが、あまり俺と一緒に帰ろうといってきてくれる人は幼稚園時代には皆無だった。しょっちゅう怪我をして家に帰ってきたものだ。今だって右頬には直らないであろう傷が一本残っている。

　さらに、自分の不幸は身体的なダメージだけにはとどまらず、精神的なダメージを引き起こすという悲しいこともある。

ルックスがいまいちなのも関係していると思うのだが小学五年生の最後に幼馴染の気の強い女の子に告白してみたところ、ああ、ちなみにそのときのないようをちょっとばかり説明するなら以下の通りになる。その女の子がクラスのだれだれは～とかそういう話を一緒に帰っているときにされて俺も彼女に相談を持ちかけるように告白した。

「じ、実はさぁ、俺も好きな人がいて……」

「へぇ～誰？」

「あんた」

「……」

こんな感じで告白したのだが、返事を待ってもまったく返ってこない。挙句の果てに、毎日その女の子と一緒に朝登校していたのだが次の日から家には来てくれることがなくなってしまった。不幸である。まぁ、冗談だ。

ほかにも例を挙げるならきりがないが……中学に上がった俺は好きな人（別の人）と一緒に帰れるという権利を取得！勇気を出したまでは良かったのだが……

「あのさ～知ってるか？〇〇さんと隣のクラスの〇が付き合ってるんだってよ？」

「え？」

隣のクラスの〇を俺は嫌っていたのだが……その話を聞いたとき、俺は世界が滅亡してしまったのではないか？と錯覚してしまった。毎朝犬に追いかけられたり車にはねられそうになったりはしたが、これが一番精神的にこたえた。

一家も早いうちからばらばらになってしまっているのでその話をする相手もおらずに俺は自宅に帰って泣いた……なんてことはなく、ああ、それなら〇〇さんの友達に声をかけてみよう！というポジティブな気持ちだった。

いつか大きな幸せを手に入れて見せるぞ！と、意気込みながら自炊を開始した自分だったのだが……そのときはまだ、知らなかったのだ。

大きな幸せは不幸であるということを……

一、

俺が幸せを求めて『大幸筋学園』に入学してから一年の月日が見事に過ぎ去ってしまった。二年生になるための難解のテストを風邪の状態で受けてもなお、赤点をとっていなかったというのは奇跡と言っていいのだが、毎回俺がテストを受けるときは何らかの枷がつけられている気がする。

「い、いかんいかん……また不幸だ～とか思っていたら不幸を呼び込んでしまう」

ポジティブなことを考えていることにしようと決めたのはおでぶに彼女をとられたときに決めたではないか！と、俺は自分を叱咤す

る。
「いってきまーす」
もうなれてしまった一人暮らしなのだが挨拶は怠らない。挨拶も出来ない奴は人間じゃない……とまでは思っていないのだが、最低限のルールぐらいはわきまえている。まぁ、アパートには俺一人しかいないのだが……
一年間通いなれた道を通っていく……うん、半ばまで見事にこれることが出来た。朝はどうやら不幸が俺を襲わないようだ……
そう思っていた俺を不幸が襲う。
「あ、あぶなぁぁぁぁぁぁぁい！！！」
「え？」
振り返ると下り坂を物凄いスピードで失踪してくる危ない自転車が……今歩いているところは狭いところなので避けることができない。
どうする？
俺はそう思った。いや、もう思った時点で手遅れだった。次の瞬間には見事に俺の顔面を自転車の前輪が直撃し……俺はそのまま倒れ、用水路を見事に飛び越えて息、爆走していく自転車をさかさまになってみていたのであった。
そして、何故か無常にも学校が機動を始めるチャイムが鳴り響く……どうやら、うちの目覚まし時計に腕時計がばらばらの数値を刻んでいると思ったらどっちもずれていたというわけか……
「……昨日は間違いなく動作を確認したはずだったんだが……がくり」
俺は気絶し、世界が暗闇に包まれていくのを感じたのだった。
――――
「すみませんっ！遅刻しました！」
「遅いぞ、馬鹿たれが……遅れるときはきちんと連絡しろといっただろうが？」

で、今日はどんな不幸にあった？と俺に尋ねてくる担任……その顔が面白そうに歪む。
「えっと、自転車にひかれました。顔面にあとまでつけて……」
そういってクリーニングしたてだったのだがぼろぼろになってしまった学生服を担任に見せる。
「ふむ、まぁ、いいや……早く席に座れ」
「はい……」
今日は始業式だったのだが……見事に俺は遅刻してしまったというわけだ。既に始業式は終わってしまって後は帰りのホームルームのみとなっている。
俺……吉野幸児（よしのこうじ）は開いていた席へと座る。既にくじ引きが行われていたのか、一番前の席だった。
「え～明日から授業が始まるので各自、きちんと準備をしておくように！」
「……あれ？」
俺は先生の言うことなどそっちのけでクラスをぐるりと見ていた。その中に見たこともないような女子が……いや、今日の朝、俺の顔面を自転車で踏んでいった奴だった。

――――――

ホームルームが終わってから人だかりが出来ている女子高生を遠めで俺は見る。近くにいたのが先生だけだったので俺は先生にたずねてみることにした。
「お？どうした、吉野？あの子？ああ、彼女は転校生だ」
「……転校生？」
そうだと先生は言って言う。
「彼女、急な引越しでここに来たそうだ。勿論、編入テストとか受けているからな～めちゃくちゃ頭が良くて運もいいそうだぞ？今日の朝だって遅刻しそうだったのだが自転車が見事に用水路を越えて間に合ったそうだ……ん？顔色が悪いぞ？」
「い、いえ……気にしないで下さい」

まさか、あのデンジャラスな運転をしていた女子高生が俺と同じクラスになるとは……不幸だな、俺。いや、待てよ？勝手に踏み抜いていって謝りにもこないのだ……俺が何かを相手に要求しても大丈夫なんじゃないのか？そこまで考えて俺はやめた。どうせ、何かが俺をさえぎるのだろう、ためしに俺は彼女に近寄ろうとして、一歩手前でストップした。

どごーん！！！

俺が後一歩踏み出していたら間違いなく潰されていたに違いない……俺の目の前には石膏が一つ転がっていた。

「す、すいません！」

男子美術部員がそういって俺の前から石膏を拾い上げていく。

「ちょっと、吉野君が来たわよ！」

「不幸の塊が来た……律咲さん、行きましょう？」

律咲と呼ばれた転校生はクラスの女子たちにつれさらわれていったのだった。

第二話　不幸がちょっとした幸せに変わる時

二、

「あ？あのときはごめんね？傷、大丈夫？」

「い、いや……こんなのかすり傷だし……」

「あの時は遅刻しそうで君を踏んづけてしまってごめんね？」

「き、気にしないでいいって……」

な～んてとても都合のいい展開にはどうも転がってくれそうにもない。

「……惨めだし、帰るか……」

俺は首をすくめて誰もいなくなってしまった教室から帰宅することにしたのだった。

――――――

「右よし、左よし、上よし、下よ……」

どごすっ！！

「ぐはっ！！」

確認したはずの右から何かが飛んできて俺を左の方向へと引っ張っていく。そして、ちょっとの間宙に浮いている感覚を味わうと俺は自分の倒れる地面を見て……

「！？」

犬の糞があるのを確認した。しかも、体が回っているので計算として……背中に糞があたる！？

「そ、そうはさせるかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺は両手、両足にいっぱいの力を入れる……と、どうだろうか？衝撃はかなりのものだったのだが、背中に糞がつくことなく空中可変ブリッジという俺にしては上出来の技を俺は見事にこなして見せたのだ！

「お、おお～」
周りからは俺を賞賛する声が聞こえてくる。
「……妙だな？」
俺は立ち上がって首をしかめる。
「……いつもの俺だったら見事に背中に犬の糞を引っ付けていただろうし、あの転校生に不用意に近づこうとしていたに違いない。ところがどうだ？現実は何故か考えを改め、見事に飛んできた石膏を避けた……例え、考えを改めていたとしても石膏が自ら動き出したりして自分につっこんできたのかもしれない。
「うん、俺にも運がまわってきたのかな？いや、油断は禁物だな、うんうん……」
思えば右頬に何かがつっこんできたのだ。そう、それさえなければ空中可変ブリッジなどしなくて良かったのだ。
「……で、何が飛んできたんだ？」
俺は当たったものを探して見つける。
「鞄か？」
そこに転がっていたのは俺が通っている学園の通学用鞄だった。
「俺の？じゃないな……じゃ誰のだ？」
飛んできた方向を見る、すると、一人の女子生徒がこちらへと走ってきたのだった。
「す、すいませーん！！」
頭から血を流して……いや、別にホラーでもなんでもない。きっと、こけたりしたのだろう……額から血は流れているのだが別にざっくりと切っているようでもないようだ。
俺のもとへとやってきたその子は頭をなんかいもなんかいも下げる。
「すいませんすいません！！」
「え、い、いや……ところで、頭から血が出てるけど……」
「あ、こ、これはただちょっとこけただけなんです！あの……」
そういって百メートル以上も離れた場所を指差す。

「……場所でちょっと小石に躓いて転んでしまって……」
「……」
見えん、というか……こんなに鞄が飛んでくるものだろうか？
俺の体をちょっととはいえ、吹き飛ばしたのだ。
「し、信じてもらえませんよね？」
「え？」
怒られた犬のような顔をする……ちょっと幼い感じのする女の子がそうするだけで俺は別に必要のない罪悪感を感じてしまった。
「あ、いやいや……ご、ごめん……」
何故、俺は謝っているのだろうか？と考えてしまう……
「そ、それより血が出てるからほら……絆創膏。ちょっと頭、見せてくれ」
「ふぇ？」
頭に砂とかついていないようなのでとりあえず、応急処置として大き目の絆創膏をおでこに張ってあげる……とてもこっけいな女の子になってしまった。
「くふ……おっと、さ、これで大丈夫だから」
少々笑いそうになったのだがそこは自分のお尻をつねって我慢……俺はそういって転がっていた自分の鞄を掴む。
「あ、ありがとうございました！」
女の子はそういうと走って去っていってしまった。
「……名前、聞いておけばよかったな～」
同学年にはちょっと見えなかったのできっと新しく入ってきた女の子なのだろう。ああ、ああいう女の子と付き合うのもいいなぁ～……と、考えていて俺は辺りを見渡した。
「いやいや、俺は何を考えているんだ？よし、今度はもう大丈夫だよな？」
また鞄が飛んできて空中ブリッジなどをしたくない。俺は再び不幸が襲ってくる前にその場を後にしたのだが……
「ん？」

あと半分ぐらい歩いていたらアパートであるというところまで来たのだが、俺の足元に何か白い封筒のようなものが落ちていた。
「……」
どこからどう見ても怪しい、トラブルの種だ、拾うのはやめておけ……といった感じで俺の頭はそれを見ないようにして通り過ぎようとしたのだが……俺は好奇心に負けてしまった。
「……これって？」
中に入っていたのは誰かが手書きで書いた地図で、ここからそう遠くない倉庫のところに×印がつけられている。もしかしたら何かのお宝でも入っているかもしれない……とまぁ、どうせいたずらか何かだろうかと思っていたのだが、意外と何かあるかもしれない。俺はその方向へと向かったのだった。

――――――

「ん～っ！ん～っ！！」
「え？」
裏口から倉庫に入ると、近くに猿轡をされて縄で縛られている女性がいた。その女性は俺の通っている学園の女子制服を着ていた。
「だ、大丈夫ですか？」
「ぷは～っ……ありがと、王子様」
「王子様？」
俺は首をかしげ、ああ、この人を助けたからか～と考えていた。
「さてと、これから犯人の暴露をしないと……これ、お礼」
「え？あ、ど、どうも……」
渡されたのは一枚のメモ帳で、電話番号が書かれている……
「これは？」
「私の携帯電話……何か用があったら連絡してね……バイバイ」
彼女は手を振り（俺はぼーっとしていたのだが、手を振り返した）裏口から去っていった。
「……ここ、なんかやばそうだな……逃げよう」

俺が完璧に倉庫から出て行った後、怪しげな男たちが俺を通り過ぎて言った。そのとき交わしていた会話が

「あの女が逃げた！」

というもので、俺は少々びびったもんだ。その夜、あの倉庫の地下にいた犯罪グループが匿名情報で逮捕されたとＴＶでやっていた。

第三話　おかしいと気がついたときには……

三、

おかしいと、俺は家に帰って考えていた。

「……不幸な上にあまり縁のない女性に今日は3回ほど関わった……これはなんだ？嵐の前の静けさか？」

それとも、有頂天になっている俺を地獄に落とす余興か？ドッキリか？

トイレにこもって考えていても答えは出ない。あれだ、そう、これは神様が俺にくれた用心の期間なのかもしれない……

「……明日からは細心の注意を払って生きよう！さて、ついでに買い物に行ってくるか……にんじんが今日は安かったな」

財布を持って俺は近くのスーパーへと行くことにした。

――――――

「思ったより安くて助かったな……」

スーパーから家へと帰宅する途中、消防車が俺の隣をけたたましいサイレンを鳴り響かせながら駆け抜けて言った。

「お？火事か？」

不謹慎だが、野次馬根性で走ることにした。ちょうど、手元ににんじんだってあるからな……あれ？消防車が向かっている先ってどこだった？

「って！あの方向は俺んちのアパートじゃねぇか！」

あわてて走り出す……これは野次馬ではない、もしかしたら当事者……いや、被害者かもしれない！！

ぼろぼろのアパートの前に着くと、見事にそこは炭と灰となっていた。

「あ、吉野君！無事だったんだね？」

「大家さん？燃えちゃったんですか？」

「そうなんだ……」

サラリーマン風の男性が俺の前にやってくる。
「幸い、皆会社とかにまだ言っている時間帯だからね……僕は連絡があったから急いで戻ってきたんだ。吉野君が無事でよかったよ……」
心底ほっとしていたようで、俺はなんだか嬉しかった。こんな俺でも誰かに心配されるのだなぁ～と。
「悪いけど、吉野君……ここがこうなってしまった以上、出て行ってもらうしかないんだ」
「……確かに、その通りですね」
燃えてしまったのだ、二階立てのアパート……いや、集合住宅と言っていい。共同の風呂にトイレだったからな……
「今日は俺も自宅に帰ります」
「うん、そうしてもらえると嬉しいよ」
消防関係の人が大家さんを呼ぶと、俺も邪魔になってはいけないと思ってその場を後にした。
「……とりあえず、家に連絡を……あれ？」
ポケットをまさぐるが、携帯がない。
「……部屋の中に忘れたのか？」
いや、部屋の中のときもなかった気がするんだが……まさか、どこかで落としてきたとか？
俺はあわてて自分が今日通ったすべての道を再び歩き出した。まずはスーパーへの道だろう。
「……ないな」
スーパーへの道を調べてまわったのだが五百円だが落ちているぐらいで他には何もなかった。
「……倉庫への道か？」
そういえばあの女子生徒を助けるときに落とした気がするのだが……いまさらあの危なそうな倉庫に行きたいとは思わないが……
「いくしかないか……」

覚悟してそこへ向かったのだが……

「はい、危ないから下がって～」

「え？」

警察が倉庫の周りを囲んでいてＫＥＥＰ　ＯＵＴと書かれている黄色い紐が俺を中に入れさせてはくれなかった。

しかし、その程度でこの前変えたばかりの携帯を手放すわけにはいかない。別に俺が中に入れなくてもそこらへんを歩いている暇そうな警官を探して訪ねればいいのだ。まぁ、なかなか暇そうな警官がいないのだが、それでも鑑識らしき人を見つけると俺はその人に話しかけた。

「すいません、この倉庫の中にミジンコのストラップがついた携帯がありませんでしたか？」

「……？」

当然のように不思議そうな顔をされる。

「実は、この前ここに間違えて入っちゃったときに携帯を忘れてしまったんです」

信じてもらえたかわからなかったのだが、相手は首を振った。

「残念ながら携帯はなかったな～……それ、本当に君の？」

懐疑的に染まっていく鑑識さんを見て俺はもう駄目だと思った。だから、ありがとうございましたといってその場を去っていったのだった。

――――――

万事、窮すだな……と、街中を歩きながら考えていた。

『え～今入ったニュースです！○○町の倉庫で……』

電気屋の新型テレビが能力を見せ付けるために道行く人たちに今日あったニュースを伝えている……

「……今、手元にあるものは……」

着たままの学生服をまさぐると、出てくるものは……財布、先ほどもらったメモ、ペンぐらいだ……食べ物にいたっては手にしているにんじんぐらいしかない。

「ん？メモ？」
そういえば電話番号が書いてあったな……あの女子生徒の携帯電話の番号だっただろうか？しかし、いまさらそれがなんになるのだろうかと思ったのだが……まぁ、女性の声でも聞いているだけで俺は元気になるからな……
「……」
近くの公衆電話へと入り、その電話番号をプッシュ。
『え～と、どなた？』
あの時聞いた女性と同じ声が受話器から聞こえてくる。
「え、えっと……あの、倉庫であったものなんですけど……」
『ああ、王子様？』
警戒心は消え、ちょっと人を見下しているような声が聞こえてくる。
「テレビ、見ました……警察に連絡したのあなたなんですか？」
『ええ、そうよ？すごいと思わない？潜入までしちゃったんだから♪』
その後、一方的にどういった経緯でああなったのか（そういうことが趣味だそうだ）何故つかまったのか（おなかの音が相手にばれたそうだ）俺に助けられた後どうしたか（警察に匿名で情報を提供したそうである）などなどと、語ってくれた。
『……といったことがあったのよ。どう？すごいとおもわない？』
今日何度目であろうか？再びそんなことを俺に言ってきた。俺はそれに対して一つしか答えを持っていない。
「ええ、すごいですね？」
『そうでしょう？すごいぞ、私！』
きっと、受話器の向こうで胸をそらしているのだろう……
誰かもわからない相手同士が話している内容としておかしいのだが、それ以上にこの関係もおかしい。

『で、何かお礼とか必要かしら？』
「！そ、そうなんです！えっとですね……実は火事で……」
ようやく、期待していた展開が俺へとまわってきた……と思ったのだが、そのとき俺に不幸がまわってきた。
ぷつん
「……じ、時間切れ？」
財布を捜そうとするが、財布がない！いつ、とられたのかわからない……そして、近くのＴＶでは『鑑識の姿をしたすりに注意！』という報道があっていた。

第四話　笑えない冗談と笑えない終わり方

四、

マッチ売りの少女を皆は知っているだろうか？マッチ売りの少女とはデンマークのとある有名な童話作家の創作物語なのである。

さて、そのマッチ売りの少女のあらすじはこうだ……大晦日にマッチを売ろうとしているのだが、ぜんぜん売れない……売れずに帰ってしまえば父親から怒られてしまうということで、彼女はがんばったのだが売れなかった……そして、マッチに火をつけると七面鳥とか、おばあちゃんとかが出てきたということである。

「……あ、それをしようにも俺、マッチもってねぇや」

街中でしょげている俺のポケットの中にはマッチなど、ない。幻想的な気分に浸りたいと思っていたのだが、これではリアルマッチ売りの少女が出来ないではないか？ああ、俺は男だからマッチ売りの青年になるんだな。

「……はぁ」

出てくるものはため息とおなかの音ばかり……今、俺がすべきことなんて何一つない。親に連絡をとるなんて今の俺には考えられない。

「……」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

突如、公園へ続く階段に腰掛けていた俺の後ろから何かが迫ってくる音が聞こえた。ああ、そういえばここらへんってそろそろ暴走族が出るんだっけ？こうなったら風になるのも……悪くないかもしれない。混ぜてもらうこととしようか？

俺はそんな馬鹿な考えを捨てた。しかも、なんか既視感を感じる……

「ん？」

振り返ると、猛スピードで何かがやってくる！うを？な、何だ？

最近の暴走族はバイクとかで階段を駆け下りたりするのがすきなのか！？
　そんなことを考えているのなら脇に避けるべきだった……俺はそのまま走ってきた何かにぶつかり、階段をそのまま落ちていく……
　このままではさすがの俺も死んでしまう……花畑の向こうに河川敷、そして、そこには鬼さんがトラ柄パンツに金棒ではなく船頭さんスタイルでオールを手にして俺に手を振っている……あ、ばあちゃんが迎えに……
「ちょっとまてやぁぁぁぁぁ！！うちのばばあはまだ元気じゃぁぁぁぁ！！！！」
　俺は何とかこっちに戻ってくることが出来、未だに浮遊感は続いている……くそ！もう駄目なのか？こっちに戻ってきてもどうせ、また逆戻り……なのだろうか？そう思った俺だったが……
「はっ！！！」
「え？」
　気がつけば誰かにお姫様抱っこの状態で助けられていたのだった。
「え？あれ？」
「ふぅ、万事休すだったわね……危うくうちの妹が無実の人間をあやめるところだったわ」
　そういって立ち上がったその相手はどこかで見たことがあるような人だった。
「あ、あなたは……」
「あら？王子様じゃない？」
　俺を抱きとめてくれているその女性は、倉庫の裏で捕まっていたあの人だった。
「あ、ありがとうございます……」
　くたばりそうだった俺を助けてくれたこの人はいわば、命の恩人である……
「と、それより、さっきは公衆電話切れちゃったわね？あの続き、

聞かせてくれる？私、気になることがあったら最後まで知らないと駄目なのよ～……だから、この町の公衆電話の辺りを探してて、たまたまあなたを妹がはねてそのままあの世のそこに叩き落そうとするのをみて助けにはいったわけなのよ。さぁ、教えて？」

俺をおろし、俺はそういわれたので素直に答えることにした。家が燃え、携帯などはなくなった上に財布まで取られてしまったということを……

「成る程～、そういうことだったのね？はい、あなたの携帯ね？」

「え？何でもってるんですか？」

差し出された携帯を俺はぎょっとしながらも見つめる。

「それはね……」

「だ、大丈夫ですか！」

上から先ほど俺の命を故意ではないにしろ、しとめようとした相手がやってきたのだが……

「よ、吉野君だっけ？」

「あ……」

そこにいたのは朝、俺を轢いていった転校生だった。

「……あら？お二人ともお知り合いかしら？」

「いえ……朝も俺を轢いていった人なんですけど……」

そこにいたのはあの女の子……

俺にとって、ここからが本番、終わりではないのだが……

こうして、俺たちは出会った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0362e/

大きな幸せ！と書いてふこう！と読む！

2010年10月8日15時20分発行